

私たちは、地域の一人として日頃からどのような関わり方をしていくのが大切でしょうか。



地域とともに活動する意義を考えてみよう

東日本大震災

では、日頃から顔の見える関係でいたことで避難時や避難生活でも助け合うことができました。日頃から挨拶を交わすことや、地域のお祭りや行事と一緒に歩いていくことで災害時の助け合いにも生かされます。私たちが、地域の人たちと関わっている生活を見直してみましよう。



地域のお祭りに参加する中学生（村田町）



地域の一員としての災害時の役割を自覚

地区の防災訓練に参加して

石巻市広瀬地区で防災訓練が行われました。

この地域は、2003（平成15）年7月25日に発生した宮城県北部地震で大きな被害を受け、この地震以降、防災訓練が毎年行われてきました。

その訓練に、地域の一員として参加していた中学生たちがいます。この中学生たちは、避難所開設時の受付での名簿作成や避難者の誘導を担当するなど、精力的に活動しました。この訓練に地域の一員として参加したことで、いざ、災害が発生したときには、地域の中で何をすればよいか確認することができました。



受付をする中学生



この中学生たちが将来、地域のリーダーとなっていてくれるだろうと期待しています。

地域の方の声



誘導する中学生

町の総合防災訓練に参加して

柴田町総合防災訓練では、災害ボランティアセンターの開設訓練が行われました。

東日本大震災では、災害ボランティアセンターを開設し、町内をはじめ各地から大勢のボランティアの方々に支援に来ていただきました。地域の中高生も自らの意思で、率先してボランティア活動に参加し、地域の大人や各地から支援に来てくださったボランティアとともに災害支援活動を行いました。

柴田町の訓練では、地元の中学生が災害ボランティアコーディネーターと一緒に「受付」「オリエンテーション」「資材係」等の役割を仮想で体験しました。

大規模災害時にボランティアに来て活動して下さる方々の理解や、被災者の方々が支援してほしいニーズやボランティアの役割等を確認しました。



ボランティアのマッチングを体験する中学生

柴田町社会福祉協議会職員の声



東日本大震災のときは、町内の中学生が自らの意思で大人と一緒に活動しました。支援物資の仕分け、給水の補助、高齢者住宅での片付け、おにぎり作りなどたくさん活躍しました。この震災を教訓に中学生が災害ボランティアの対応にも協力してもらおうと大変心強い。訓練に参加したり、日頃から災害について学ぶことは大切なことだと思います。

学校での防災訓練を通して

震災から4年後の2015（平成27）年6月7日に、亶理町立荒浜中学校を会場に町の総合防災訓練が行われました。

訓練は、校内での活動時に震度6弱の地震が発生し、30分後に津波が到達することを想定したもので、地域の人たちが津波避難場所である荒浜中学校に避難してきました。校舎新築後の初めての訓練で、生徒は、近隣の住民約300人を3階建ての校舎の外階段を使って屋上に誘導しました。また、屋上では、一人ずつ聞き取りをしながら避難者の確認を行うなど、地域の人たちとともに、災害時の避難方法を確認する役目を担いました。



避難者から聞き取りをする中学生



地域で実施する避難訓練に参加し、地域の一員として行うべきことを確認しましょう。